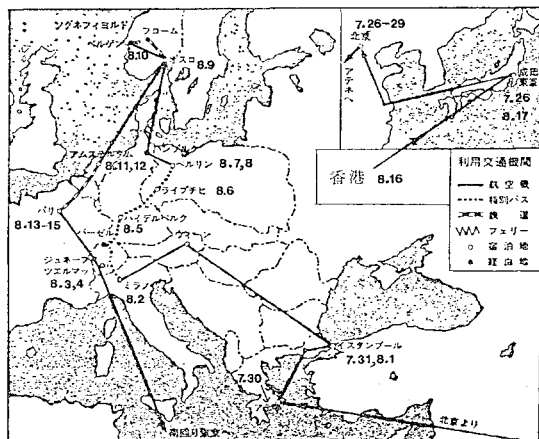


低山性のシュバルツバルトでは庇の大きい曲がり屋風の孤立荘宅が点在し、牧草や麦類を栽培し肉牛を放牧している。続くライン地溝帯は恵まれた日照を利用し、平坦なフランスとは異った斜面利用のぶどう畑が広がり甘味の少ないドイツの白ワインの主産地である。西独東部から東独への構造平野では小麦、燕麦、ビート、馬鈴薯等の大区画の畑が広がりサイロをもつ農家が散見、混合農業地帯が広がる。同じ混合農業でも東独に入ると集団農場の経営で畑の区画は更に大きく、農業機械での作業風景が見られたが肥料に自然の人糞をスプリンクラーで与えていた。畜産・農業部門からなる平均的集団農場（豚5千、牛2千、耕地5千ha）を訪問したが、生活には満足し有利な公道定価格の為自由市場のない点が他の社会主義国に比べ興味深かった。オランダではアムステルダム北部の園芸地域と世界1のアールスマ生花中央市場を見学、その規模の大きさにオランダの園芸農業の地位を感じる。反面、ゾイデル海締切り大堤防見学の途上、ポルダーは殆んど牧場で、草をは

む乳牛の多さに、農家は安易に政府に保障される酪農を求め、その結果が“バター”の山、牛乳の海”といったECの問題を喚起していくのだと痛感する。

本稿は、1982年1月23日、お茶の水地理談話会での発表要旨である。

（8回生 東京女学館高校）



## ヨーロッパの旅から—ボルドー—

武田 む つ み

1981年7月から8月にかけて、28日間のヨーロッパ旅行の機会に恵まれた。主人の国際会議への同行という形の為、コースの選択に多少制約があったが、ヨーロッパ内はすべて列車で移動（夜行を含む）し、もっぱら自分の足で歩き、現地の人々と接することができた。地理学的な旅とはいえなかったが、団体旅行にない私たちなりの旅の楽しさを充分味わうことができたと思う。宿泊地はパリ→ボルドー→アルル→ナポリ・ローマ→ピサ・フィレンツェ→ローザンヌ・ルツェルン・ベルン→カールスルーエ・フランクフルトだったが、今回は観光旅行では訪れる機会が少ないと思われるボルドー周辺を中心に少し報告させていただいた。

パリのオーステルリッツ駅から特急列車に乗りこむと4日間歩き回ったパリの街はあつという間

にすぎ、広々とした田園風景が続く。麦畑、飼料畑、ひまわり畑等々、視界に山の姿はなく、やはりヨーロッパは大陸だどつくづく感じさせられる。ツールでロワール川を過ぎるといよいよ南フランス。ボワチエを通り、約4時間後、ガロンヌ川の鉄橋を渡りボルドー駅へ到着。郊外のボルドー大学へ落ち着いた。市街は18世紀風の建築が並び、ガロンヌ川に臨む一角はローマ時代からの旧市街になっている。

ボルドーは南はピレネー山脈、東は中央高地に囲まれたアキテーヌ盆地の中心都市である。この盆地は地中海と通じていたビスケー湾の南東端が第三紀の経過と共に陸化してできた低地帯で、ジロンド・ガロンヌ川流域からその右岸は石灰岩の丘陵地帯で東へむかって高度を増している。一方、左岸はピレネーより供給された物質からなる複合

扇状地が広がり、陸化の最もおくれたその北西側は偏西風による砂丘が幾列にも並び（ヨーロッパ最高のピラ砂丘、114mがある）、海岸の砂丘の内側には潟湖が形成されている。その内のひとつ、私が訪れたボルドー西方60kmのアーカッション湾は幅3kmのchannelで大西洋と接しており、飛砂を防ぐ為植林された広大な松林に囲まれている。ここは気候が温暖で、林中や湖岸に沿って保養地、海水浴場が点在している。この湾では漁業が盛んだが、特に19世紀以来カキの養殖で知られ、養殖場は約2,000ha、約1万人が従事しているという。日本では“r”のつく月はカキを食べるというが、こちらではJulyでもおかまいなしで、生ガキがふんだんに供された。

生ガキ、というと白ワインだが、このボルドー地方はブルゴーニュ地方と並び、ワイン生産地として世界に名高い。ここでフランスのワインの15%、上質なものに限れば40%を産している。ブドウ栽培は紀元前から行なわれており、ガロンヌ川・ドルドーニュ川下流域、ジロンド三角江の両側、シャラント川流域等の第三紀石灰岩層上に排水の良い砂礫層が堆積した日当たりの良い斜面が主産地になっている。ボルドーワインがパリに知られる

ようになったのは18世紀からだが、13~15世紀のイギリス占領期にこの赤ワインがボルドー港から盛んにイギリスへ運ばれ、ボルドーといえばワインの代名詞になったという歴史を持ち、特に高級ワインの生産が盛んである。ブドウ畑は3ha以下の小規模経営が多いが、中にはワインの醸造場を持ったシャトーと呼ばれる大規模なものもあり、各々のシャトーで優秀なワインを産している。私もSt. Emilion, Medocなどでいくつかのシャトーを見学したが、これらは数10haから数100haのブドウ畑の中に醸造場、地下倉庫をもち、あるものには食堂、ホールなどもあって、ここでパーティーも行なわれた。ブドウは日本の棚式の仕立て方と異なり、丈が低く垣根状になっており、列の端にはとりどりの花が咲いている。ゆるく波打つ丘陵上にどこまでも続くブドウ畑に囲まれ、尖塔をもつ教会を中心にした小さな集落やシャトーの点在する眺めはまさにのどかで非常に美しいフランス農村の一幅の絵を見る思いであった。

本稿は、1982年1月23日、お茶の水地理談話会における発表要旨である。

(20回生)